月刊

こころのとも

第十巻
三月号

不平等で不自由

人間は
生まれながらに
不平等である

生まれながらの
容姿も
能力も
環境も
すべて不平等である

人間は
生まれながらに
不自由である

生まれながらに
無力で
誰かの
援助なしには
決して
生きていけない

なのに
なぜ人権宣言は
人間が
生まれながらに
平等で
自由だ
というのか

人生を考え直して
みたい人は（六二）

―『正法眼蔵』解説（六）―

現成公案を続けます。

仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。悟跡（ごじゃく）の休歇（きゅうかつ）あるあり、休歇なる悟跡を長長出（ちょうちょうしゅつ）ならしむ。

ここは、正法眼蔵全体を通じても、おそらくもっとも有名な部分だと思います。

玉城康四郎氏の現代語訳は、次のようになっています。

仏道を習うということは、自己を習うことである。自己を習うということは、自己を忘れることである。自己を忘れるということは、環境世界に実証されることである。環境世界に実証されるということは、自己の身心も他己の身心も、脱落し果てることである。そこには悟りの痕跡もとどめない。しかも、痕跡もない悟りが、そこからも限りなく抜け出していくのである。

ここに出てくる言葉で、難しいもの、あるいは、キーワードになりそうなものは、「自己・他己」「万法に証せられる」「悟跡」「休歇」「長長出」などだと思います。

私の理論でいつも対で出てきます、自己と他己という言葉、その中でも特に他己という言葉は、道元のこの部分を読んで思いついたわけではありません。後で、この部分を読むことがあって、同じ言葉だと気付きましたが、その当時、いくつかの解説書を読んで、道元のいう他己と私のいう他己は違うと思っていました。ところが、今回この解説を書くために、いくつもの解説書を読みなおしてみて、正しく解説しているものがありませんでしたが、そうであればあるほど、これは、私のものと殆ど等しい使い方だと思うようになりました。

私の自己は、無意識の「生きる力」、仏教で言いますと、「煩悩」を根幹としています。それを根幹として、その上に生きていこうとする執着が生まれてくるのです。

それは、「自己への執らわれ」だと言えます。

仏道は、解脱にいたるのが目的ですが、それは、自己への執らわれを捨てることです。ですから、仏教から言いますと、自己への執らわれこそ、もっとも警戒しなければならないものということになります。

ここで、出てきます自己も、そうした意味合いをもっています。出だしにあります「仏道をならうといふは、自己をならう也」という場合の自己も、そういうことを言っているのです。

では「自己をならう」という場合の「ならふ」とはどういうことを言っているのでしょうか。

それは、自己への執らわれ（執着）を捨てるためには、修行が要る、といっているのです。人間は、「あたま」が発達していますが、しかし「あたま」で、今日から、執着を捨てようと思えば、捨てられるわけではないのです。そうするためには、修行が要るのです。それが、「ならう」という言葉で表されている、というわけです。

では、修行するには、どうしたらいいのでしょうか。

その心理的な状態が、次の「自己をならふといふは、自己をわするるなり」ということなのです。漢字で表せば「忘我」ということになろうかと思います。それは、自己の否定です。意識的な領域における「自己のはからい」の否定です。私の理論で言いますと「自我」と「認知」と「感覚」と「情動」の否定です。それは、何かの情動（欲望・情緒・気分）が起こることを抑え、何かを感じようとせず、何も考えず、何もはからわない、といった状態です。禅宗でいいますと、坐禅（瞑想）の状態だということになります。

実は、ここまでは、意識ではからって坐禅し、それによって、意識を否定しようとします。「自己を忘れようとする」ということです。そして、そうすることで、次の段階へと進むことができるのです。それが「自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり」ということなのです。

多くの解説書や現代語訳は気付いていませんが、この「自己をわするる」ことと「万法に証せらるる」ことの間には、実は、断絶があるのです。

徹底して自己を否定するとき、ひるがえって、自己が「万法に証せられる」ことを実感することができるのです。それは、「自己の身心および他己の身心をして脱落せしむる」ことなのです。徹底して自己を否定して行くとき、自己の身心も、私の言うのと同じ「他己」の身心も脱け落ちて、自己と他己が一体となることができるのです。ここに初めて真の他己が自分の中によみがえってくるのです。誕生のときにはもっていた、他己の輝きが

よみがえってくるのです。

そうなったとき、次の「悟跡の休歇あるあり」となり、「休歇なる悟跡を長長出ならしむ」ことになるのです。この最後の部分はきわめて難しいことを言っています。それは、解脱に体達したあとの境地のことをいっているからです。その体験のない人にとって理解のできないことなのです。すべての解説書が、この体験のない人が書いたのか、不十分な解説しかできていません。

まず、「悟跡の休歇あるあり」ですが、意味は「悟りの跡をとどめない」ということです。

これを読むとき、私は既にしました「法句経」の解説を思い出します。それは、第五巻六月号と第七巻十月号です。ちなみに、前者で取り上げました偈は、次の二つです。

（九二）財を蓄えることなく、食物についてその本性を知り、その人々の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれらの行く路（＝足跡）は知り難い。——空飛ぶ鳥の跡の知りがたいように。

（九三）その人の汚れは消え失せ、食物をむさぼらず、その人の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれの足跡は知り難い。——空飛ぶ鳥の跡の知りがたいように。

これらの偈にもありますように、解脱の境地に達した人の「足跡は知り難い——空飛ぶ鳥の跡の知りがたいように」なのです。

実は、ここが難儀なところでして、解脱の境地に達した足跡は知り難いわけですから、たとえ真の解脱に達した人が「私は解脱に達しています」といってみても、その跡が分からないわけですから、それを客観的に証明するわけにはいかないのです。

そこが、逆に、いわゆる新宗教の「教祖」という人たちにとっては、ありがたいことで、解脱に達していなくても、何かの手段（マジックの使用や、言葉巧みなことや、カリスマ的なこと等）で解脱に達していると信じさせることができれば、教祖になりえるわけなのです。

しかし、たとえそうなっても、そんな人は、永い間には化けの皮がはげて、やがて「信」を失っていくことだと思います。

それは、次の「休歇なる悟跡を長長出ならしむ」部分に述べられていることです。悟りの跡は止めないのですが、悟った後の行動には、その真価が出現してくるのです。それは、まず、自分の情動（欲や喜怒哀楽や気分）を制して、他者を尊重することに現れます。他者のためにのみ生きる姿勢に現れ出るわけなのです。

自作詩短歌等選

人生は難しい！？

自分が
ダメな人間と
思えば
生きていけない
でも
自分が
よい人間と
思えば
救われない

人生は
難しい！？

人は相対的なもの

私のパートナーは
この人以外には
考えられない
というのは
とんでもない
思い違い

人は
いくらでも居り
みんな相対で
長所もあり
欠点もある

損得や選好の抑制

かつては
自分の
損得や選好を抑えて
人のために
尽くすことが
美徳とされた

民主主義のいまでは
自分の
損得と選好に基づいて
出世と欲望を
追求することが
よいことと
されている
人との関係は
迷惑をかけなければよい
とされるだけ

不平等・不自由の体験

人間は
不平等
不自由を
体験した時のみ
他者の
自由を尊重し
平等をはかろうとする
ことができる

説教したがる

自分に
説教の資格の
ない人ほど
人さまに
説教したがる

学校が崩壊する

教員は
生徒に
権威を疑え
信じるな
自分の考えに
合わぬことには
従うな
と教え
自分でも
実践している

しかし
同時に
教員の言うことだけは
信じて
従え
とも教えている

こんなことを
するから
若者のこころが
荒れ
学校が
崩壊してしまう

子育ての本の変化

子育ての本が
変わってきた
昔は
子どもの立場で
書かれていたが
今は
母親の立場で
書かれている

権利と義務

権利
してもよいこと
義務
しなければならないこと

どちらも
背後に
他者があることを
忘れてはならない

ピーナッツ夫婦

最近の夫婦は
ピーナッツ
二人で殻に
閉じこもっている

生まれながらの友愛

人間は
生まれながらにして
友愛に満ちている
どんな子も
愛くるしい

でも
それが
他者を忘れさす
個人的自由の
主張によって
失われていく

人間は
個人として
生まれながらに
自由で
平等だという
思想によって
汚されていく

自作随筆選

大統領弾劾騒ぎ

二月十二日に、クリントン・アメリカ大統領の弾劾裁判で、無罪の判決が下されました。世界中を騒がせましたが、大統領にとっても、アメリカにとっても、ほっとする結果だったように思います。私は、この騒ぎが、実にアメリカらしい、民主主義の行き着く先を示しているようで、興味深く見守ってきました。

この事件については、いろいろな観点から、振り返れると思いますが、先に述べましたように「民主主義の行き着く先を示すもの」として、以下、検討して見たいと思います。

まず、民主主義では、個人の自由が尊重されますが、それは、必然的に規範意識の希薄化をもたらします。

民主主義では、多数決でものごとが決定されていきます。その場合、各個人がそれぞれ判断を下すわけですが、その判断は、どこまでも一人一人が自分で自主的に行われなければなりません。それが、個人の自由ということだからです。ということは、判断の基準が自分自身だということです。自分の外に判断の基準を求めるのが、実は、伝統や慣習であったり、規範だったりするのです。それは、宗教的に言いますと「聖なる教え」と言えます。日常的な言葉で言いますと、道徳であり、倫理であると言えるのです。それは、私の言葉で言いますと、他己ということになります。個人の自由が強調されますと、それが弱くなってくるのです。

クリントン大統領の行動を見ていますと、まさに、規範性に欠けているように思えます。不邪淫戒を犯すことも、不妄語戒を犯すことも、たいしたことではないと考えているように思えるのです。

また、大統領の罪状をあげつらう方も、自分のことは棚上げにして、党派的に大統領を弾劾しているように思えるのです。アメリカでは、何も、大統領だけではなく、日常的に性を自由にエンジョイ（フリー・セックスを含む）していますし、自分の得になるためや、損にならないためなら、平気で嘘を言っているのです。

話は変わりますが、最近、ジェームズ・ブキャナン、ゴードン・タロック、加藤寛共著の『行きづまる民主主義』（勁草書房刊）を読み、驚いています。それは、経済行動だけではなく、政治行動でも、倫理・道徳より、選好（ＰＲＥＦＥＲＥＮＣＥの訳で、好き嫌いで選ぶこ

とを意味します）と損得勘定で行動（＝合理的に行動）するというモデルが、より現実の行動分析で役に立つということを主張しているのです。なお、ブキャナン氏もタロック氏もアメリカ人で、前者はノーベル（経済学）賞をもらっています。

彼らの主張によりますと、政治家は倫理・道徳ではなくて、自分が再度選挙されるかどうかを最大の動機として行動しますし、官僚は自分の出世と自己部局の拡大を最大の動機として行動するとします。また、国民は、自分の損得や選好で政治家に投票するとするのです。

なるほど、いま、アメリカ人は、（否、日本人こそと言うべきかもしれませんが）選好と損得勘定でしか、行動しなくなっているように思えます。私が勤務する大学は、正にそうなっていますし、本大学で起こった訴訟事件を見ましても、大学人だけではなく、弁護士も裁判官も人事院の役人もみな、そうなっているように思えます。

いま、教育現場では、子どもたちによる、学級崩壊、いじめ、不登校、非行の低年齢化と凶悪化などが問題となっています。

そして、「こころの教育」が叫ばれ、その中では、規範性の欠如が指摘されています。子どもに規範意識を形成することが大切だというわけですが、前述のように、大人こそ、規範性が問われなければならないのです。子どもたちの荒れの責任の大半は、いまの（大人たちの）民主主義の行き過ぎにあるのです。クリントン大統領弾劾裁判はこのことを如実に示してくれているのです。

また、モニカ・ルインスキー嬢は、スター独立検察官との司法取引からか、クリントン大統領との性交渉の内容について、こと細かく自白しています。大統領の精液のついた自分のドレスまで証拠として提出しています。どこか狂っています。自分を守ることがそんなに大切なのでしょうか。納得してした性交渉の内容なぞ、人に話すことではないように思えるのですが。罪を隠すことがよいことだとは言いませんが、そんなことをすれば、世間を惑わせ、大統領の権威も尊厳も失わせることに思い至らなかったのでしょうか。でも、それが、民主主義というもののようです。誰でもが、互いに平等・対等・同等なのです。人は自己に閉じ、すべての権威が否定されているのです。政治家として、うまくやる人は、仁・義・礼に欠け、ただ、狡猾な智に長けて、計算高く、ずる賢く、わる賢い、だけということになるのでしょうか。

この大統領弾劾裁判事件は、アメリカの民主主義の行きづまりと、末路を示しているように、私には思えるのですが。

サルとヒト

二月十四日、犬山モンキーセンターに行った時、各サルの檻の前に、その種の説明が書いてありましたンパンジーの大きな放し飼いの囲いの前に「ヒト」いた説明板の檻があり、一方がオープンになっていた。多分、人が入ってみなさい、という遊びだと思す。その説明板には次のように書いてありました。

身体・しっぽがなく、からだの毛は少ない。
・器用な前足と大きな脳を持つ。
・二本足でまっすぐに立って歩き、サルの仲間のくせに木登りがへた。

食性・なんでもよく食べる雑食性だが、一頭ごとの好き嫌いは多い。
・食べ物をいろいろ加工したり、貯めこんだりする。

習性・好奇心が強く、遊び好き。危険な目にあっても、なかなかこりない。
・大きな複雑な群れをつくって生活し、音声によるコミュニケーションがさかんである。
・「文字」や「絵」などを通じて情報をやりとりし、いつも仲間とふれ合うことをもとめている。
・しばしば、いさかいをおこし、仲間同士で殺し合いをすることも珍しくない。
・本能だけではうまく生きられず大人になるまでに身につけなくてはならないことがとても多い。
・優れた知能をもち、大きな可能性をひめているが、失敗したときにまわりに与える影響も大きい。それを忘れたとき地球上でもっとも危険な動物となる。

この看板には、これを書いた人の人間の見方がよく出ていると思います。身体や食性については、これでもよいと思いますが、習性については、人間を動物の延長線上に捉えているみたいで、残念に思いました。私は、是非、人間がサルと決定的に違うところ、「断絶」を書いて欲しかったと思います。それは、ヒトが「人を求め・愛する力」や「人の心を感じるこころ」を持っている、ということです。他者を「選好や損得」抜きで、助け、世話し、分け与えることができる、ということです。

釈尊のことば（七八）

―法句経解説―

第二〇章　道

（二七三）もろもろの道のうちでは〔八つの部分よりなる正しい道〕が最もすぐれている。もろもろの真理のうちでは〔四つの句〕（＝四諦（したい））が最もすぐれている。もろもろの徳のうちでは〔欲情を離れること〕が最もすぐれている。人々のうちでは〔眼（まなこ）ある人〕（＝ブッダ）が最もすぐれている。

この偈は、仏教の基本的な考え方を示すものと言えます。八つの部分よりなる正しい道＝八正道と、四諦と、情欲を離れることと、ブッダ、とについて述べています。

八正道と四諦については、すでに、第二巻三月号（八正道について）と第八巻二月号で（両方について）述べました。お持ちの方は、取り出して復習して頂けたらと思います。お持ちでない方は、お申しつけ頂ければ、お送りいたします。

ですから、ここでは、「欲情を離れること」と「眼ある人＝ブッダ」についてふれておきたいと思います。

「欲情を離れること」ですが、これは、中国でいう仁の教えに含まれています。仁は、自己を制して、他者を尊重することです。自己を制するとは、自己の情動である、①欲望、②情緒、③気分などをコントロールすることです。①欲望には、主に、食欲と性欲と優越欲があります。②情緒には、快苦喜怒哀楽などがあります。③気分は、特定の対象がなく、落ち込んだり、高揚したり、といった、比較的長く続く精神の基調です。

仁は、徳としてこうした情動を制することを要求しますが、仁と仏教の教えとの違いは、仁は意識してそうすることを求めますが、仏教はこころを磨いた結果としてそれが実現されることを主張します。

実は、理性（自我―人格と認知―言語）で、どんなに意識して情動を制御しようとしても、情動は勝手に動いてしまうのです。情動は、こころを磨く修行をするときのみ、制御できるようになるのです。

次に、ブッダですが、これは、悟りを開いた人という意味で、釈尊だけを言うわけではありません。

ブッダが、「眼（まなこ）ある人」とは、どういうことなのでしょうか。それは、解脱した（悟った）人には、こころの眼がある、という意味です。眼ということで、

その心境をいいますと、「見ること無くて、見ざるもの無し（無見而無不見）」ということです。

（二七四）これこそ道である。（真理を）見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして（打ちひしぐ）ものである。

出だしにあります「これこそ道である」のこれこそとは、何を受けているのでしょうか。多分、前の偈（二七三）の出だしに、「もろもろの道のうちでは〔八つの部分よりなる正しい道〕が最もすぐれている」とありましたので、その「八つの部分よりなる正しい道」を受けているのだと思います。それは、いわゆる八正道と呼ばれるもので、釈尊が最初期に説かれた教えです。

復習しておきますと、次の八つを言います。

①正見（しょうけん―正しい見方）
②正思（しょうし―正しい思い）
③正語（しょうご―正しいことば）
④正業（しょうごう―正しい行い）
⑤正命（しょうみょう―正しい生活）
⑥正精進（しょうしょうじん―正しい努力）
⑦正念（しょうねん―正しい気づかい）
⑧正定（しょうじょう―正しい精神統一）

これらは、次のように四つに分けられます。

一、正見（基本的立場としての見方が正しいこと）
二、正思　正語　正業（身口意の正しいこと）
三、正命（正しい生業に従事すべきこと）
四、正精進　正念　正定（修行の仕方が正しいこと）

そして正しいという条件として、①妄見を離れる、②顛倒を離れる、③極端を離れる（中道）の三つがあげられます。

さて、偈にあります「真理を見るはたらきを清める」とは、どういうことなのでしょうか。

まず、真理ですが、これは私たちの無意識に宿っています。ですから、それを見る働きも無意識にあります。その見る働きを得るためには、自己への執着を捨てて、無意識で、他己と一体化しなければなりません。それは、無意識のことですから、意識してはできないのです。ただ、聖者の教え（八正道）を信じて、ひたすら修行するだけなのです。それが真理を見る働きを清めることになるのです。そのとき「悪魔を迷わして、打ちひしぐ」ことができるようになるのです。つまり、自己の情動をコントロールすることができるようになるのです。

後記

一、梅の花が咲き、急に春めいてきました。でも、今年は、雪がたくさん降り、どこのスキー場もまだまだ、滑れるようです。二十年前なら、喜んだところですが、ここ十三年間は、まったく行っていません。

二、最近、私は主食を玄米いも粥（かゆ）にしています。一日に二勺半（約三八㌘）ほどに、焼き芋を入れて、朝晩二回に分けて食べています。お茶碗一杯ずつです。

三、作り方ですが、お粥を作るポットで五勺（二日分）一度に作ります。寝る前に玄米とお湯を入れておきますと、朝お粥が出来上がっています。それに、焼き芋をさいの目に切って入れ、もう一度加熱していただきます。よくかんで食べています。健康にはよいようです。なお、お粥の他には、具のたくさん入ったみそ汁一杯と、ココア一杯いただきます。また、毎朝、自分で作った「シタビラメ」の干物を一匹あぶって、主骨だけとって頭までいただいています。

四、シタビラメは、毎冬一〇〇㌘三八円ぐらいなのですが、今年は不漁なのか、ずっと五八円が続いています。干物の作り方ですが、内臓を出して、三〇分ぐらい、薄めの食塩水につけて、串に指し、干します。数日で乾きますので、冷凍保存します。かなり永い間もちます。

五、かつてのゼミ生の人の依頼で、二月二二日に阿南市の保育所に講演に行きました。園児のお母さん方、四〇人ほどが、熱心に聴いて下さいました。話の内容は、子育てで大切なこと、①愛情（常に目を掛けておく）と、②自由（子どもの自発的な行動と成就の喜び）と、③統制（耐えてさせること、しつけ）が中心になりました。

六、二月一二日～一四日に、四日市市と名古屋市に学習障害の研究打合せのため、出張しました。

七、また、二月二六日～二八日に、福岡県久留米市にも出張しました。九州の道路も、四国とは違い、都市周辺はかなり混雑・渋滞が激しいことが分かりました。

月刊　こころのとも　第十巻　三月号　（通巻一一一号）

平成十一年三月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660